

井尻B遺跡 10

井尻B遺跡第16次調査の報告
福岡市埋蔵文化財調査報告書第721集

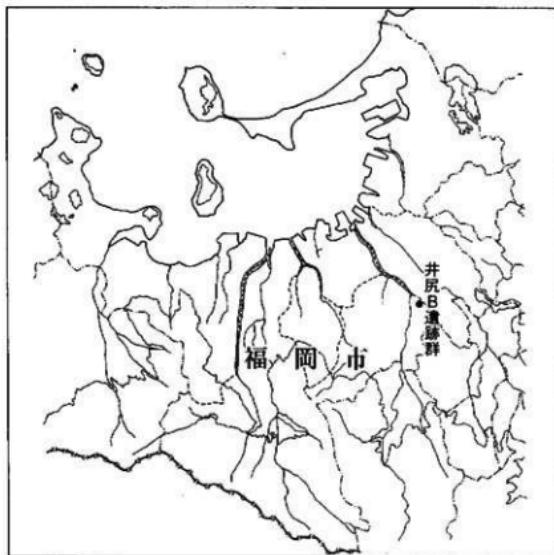
2002

福岡市教育委員会

井尻B遺跡 10

井尻B遺跡第16次調査の報告

福岡市埋蔵文化財調査報告書第721集



調査番号 0004
遺跡略号 IZB-16

2002

福岡市教育委員会

序

玄界灘を挟んで朝鮮半島と向き合う福岡市は、古くから大陸との文化交流の門戸として発展を遂げてきました。そのため市内には数多くの歴史的遺産が残されており、それらを保護し子孫に伝えていくことは私達の義務であります。しかし近年の都市開発によってそれらの多くが失われているのが現状です。

福岡市教育委員会は、このように開発によってやむを得ず失われていく埋蔵文化財について事前の発掘調査を行い、できる限りの記録の保存と調査結果の公開に努めています。

本書は事務所建設に伴う南区井尻B遺跡の発掘調査について報告するものです。本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料としてご活用頂ければ幸いに存じます。最後に発掘調査から報告書の刊行に至るまで高木重利氏をはじめとする多くの方々の御理解と御協力を賜りましたことに関しまして心から謝意を表する次第でございます。

2002年3月29日

福岡市教育委員会

教育長 生田征生

例　言

1. 本書は2000年4月10日から5月15日まで発掘調査を行った井尻B遺跡第16次調査の報告書である。
2. 本書で使用した遺構・遺物の実測図の作成は屋山洋が、製図は名取さつきと屋山が行った。
3. 本書で使用した遺構・遺物の写真撮影は屋山が行った。
4. 本書で使用した方位は磁北である。
5. 挿図中の遺物番号と図版中の遺物番号は一致する。
6. 本書に関する図面、写真、遺物等の資料は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管される。

調査番号	0004	遺跡略号	I Z B - 16
調査地地番	南区井尻1丁目729番1	分布地図番号	No.24 板付
開発面積	150m ²	調査実施面積	132m ²
調査期間	000410~000515	事前審査番号	11-2-823

目 次

Iはじめ	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の組織	1
3. 調査地点の立地と環境	1
II調査の記録	5
1. 調査の経過と概要	5
2. 調査の記録	5
3. 小結	19

挿図目次

第1図 井戸B遺跡群の位置	2
第2図 井戸遺跡群北側発掘調査地点位置図	3
第3図 調査区位置図	3
第4図 調査区全体図	4
第5図 大型壺棺出土状況実測図I	6
第6図 大型壺棺出土状況実測図II	7
第7図 小型壺棺出土状況実測図	8
第8図 壺棺実測図I	10
第9図 壺棺実測図II	11
第10図 壺棺実測図III	12
第11図 壺棺実測図IV	13
第12図 壺棺実測図V	14
第13図 土壙墓実測図	16
第14図 土坑実測図I	17
第15図 土坑実測図II	18
第16図 土坑出土遺物実測図	19
第17図 SK015実測図	20

I はじめに

1. 調査に至る経過

平成12年1月26日、高木重利氏より福岡市教育委員会に対し埋蔵文化財の事前審査申請書が提出された。当地区が埋蔵文化財包蔵地区である井尻B遺跡内に位置することから、2月1日に埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査を行った。申請地中央に東西方向のトレンチを設定し、重機で掘り下げたところ、G.L下130cmでローム面に達し遺構を確認した。建築計画と照らし合わせると建設工事により遺構が壊されることが明確なため、事前の発掘調査が必要であると判断し申請者と埋蔵文化財課とで協議を行った結果、平成12年4月10日から発掘調査を行った。途中予想以上に遺構が多くいたため調査期間を延長し、5月14日まで発掘調査を行った。

2. 調査の組織

調査委託：高木重利

調査主体：福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課

調査総括：埋蔵文化財課 課長 山崎純男

調査第1係長 山口謙治

調査庶務：文化財整備課 宮川英彦

調査担当：埋蔵文化財課 事前審査 加藤隆也

調査第1係 屋山洋

調査作業員：加藤常信 小路丸嘉人 小路丸良江 指原始子 沢田恵子 徳山孝恵

永田優子 中村桂子 長野嘉一 宮田知明

資料整理：大石加代子 濱野年代 藤野洋子 山口初子

3. 調査区の立地と環境

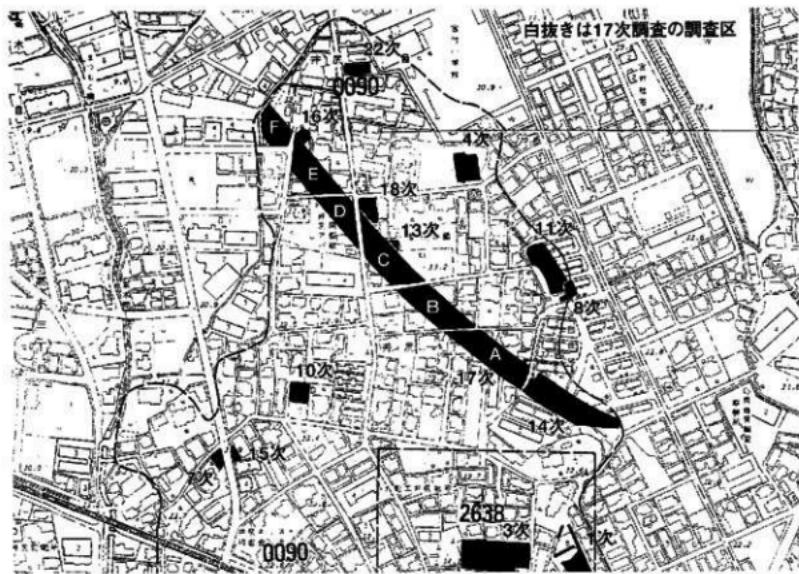
井尻B遺跡は福岡平野中央部で那珂川に沿いながら博多湾に向かって細長く伸びる台地上に位置する。台地の南端にあたる春日市には、弥生時代の国のひとつとして著名な奴国を形成する遺跡群が密集し、井尻遺跡群のすぐ南側には春日市須玖水田など青銅器製造関連の遺構・遺物が出土する遺跡が存在する。この青銅器生産関連の遺物として、石斧長石斑岩製の鋸型が井尻の台地周辺でも数点出土しているため、弥生時代後期には井尻B遺跡においても青銅器生産が行われていた可能性が高いと考えられる。また、井尻遺跡の北側には比恵・那珂遺跡という弥生時代中期後半以降の大規模な遺跡が存在している。これらの遺跡はその遺構の多さや大型掘建柱建物等の存在から大規模な拠点的集落であり、古代になつても那津官家や那珂郡衙と思われる掘建柱建物群や瓦片が出土するなど、政治的中心としての役割を果たしていたものと思われる。本遺跡はこのように南北を弥生時代から古代までの大規模な集落に挟まれており、これまで重要な遺構が存在する可能性が言われてきたものの、早い時期に住宅地として開発されたためこれまで周辺での小規模な調査が多く、遺跡の全体像はつかめていない状態である。

本遺跡のこれまでの調査の成果では、旧石器から古代の遺構が確認されている。旧石器は主に台地の両端部（西鉄大牟田線より南側）で確認されており、北側では後世の遺構から石器が出土することはあるものの遺構は未検出で遺物も少ない。弥生時代では遺物は早期の夜臼式土器や板付II式土器の

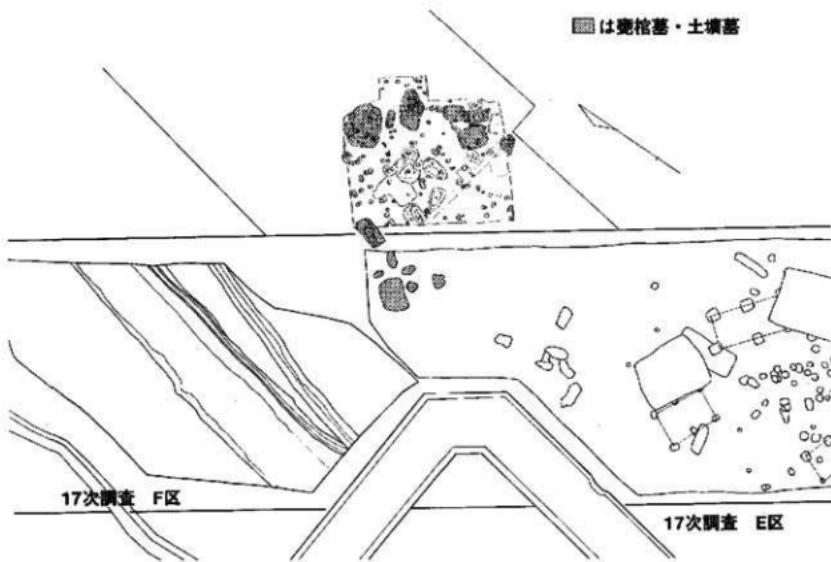


第1図 井尻B遺跡群の位置 (1/25,000)

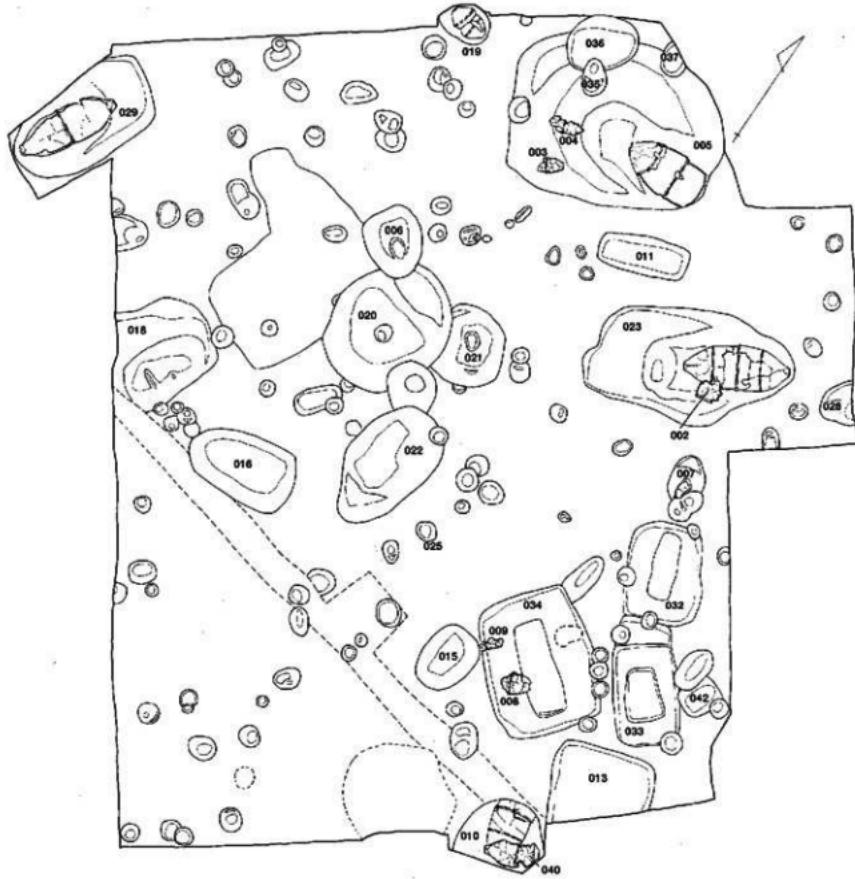
- 1 井尻B遺跡
- 2 奈居遺跡
- 3 東那列遺跡
- 4 比恵遺跡
- 5 郡列遺跡
- 6 五十川遺跡
- 7 那珂君休遺跡
- 8 板付遺跡
- 9 高畠遺跡
- 10 諸岡A遺跡
- 11 諸岡B遺跡
- 12 黄原遺跡
- 13 三筑遺跡
- 14 南八幡遺跡
- 15 井尻A遺跡
- 16 寺島遺跡
- 17 横手遺跡
- 18 大橋E遺跡
- 19 三宅B遺跡
- 20 三宅C遺跡
- 21 野多目C遺跡
- 22 佐原遺跡
- 23 佐原遺跡
- 24 日佐原遺跡
- 25 須玖遺跡群
- 26 回本遺跡群



第2図 井戸遺跡群北側発掘調査地点位置図



第3図 調査区位図(1/400)



第4図 調査区全体図

破片が出土しているが、確実な遺構は中期前半の城ノ越式の遺構が最も古い。その後、中期中頃の須
玖I式期までは検出遺構は少いものの弥生後期や古代の遺構から当時期の遺物が多く出土する事から遺構の多くが削平されたと思われる。その後中期後半から後期前半は井戸・土坑が出土しているが遺構・遺物とも少ない。後期後半になると台地全体に集落が形成される。古墳時代初頭までに多くの竪穴式住居が建てられ、その多くがベット状遺構をもつ。この時期は包含層や住居跡から青銅器の鋳型が出土し、青銅器生産が行われていた可能性が高い。遺跡の南半分では井尻B 1号墳など5世紀後半の遺構もみられるが、北側では5・6世紀代の遺構はほとんど出土しない。その後台地中央で7世紀末から8世紀初頭の寺院・官衙遺構が検出されているが、その時期の遺構は台地北端の22次調査や南端に近い6次調査などでも検出されており、台地全体に分布するものと思われる。

II 調査の記録

1. 調査の経過と概要

平成12年4月3日に埋蔵文化財課事前審査担当者や設計会社を含めて現地協議をおこなった。その結果、調査区内にあるブロック塀の除去など未協議の部分があることが判明したため調査開始予定の4月5日から始めることができず、4月10日からの表土剥ぎとなった。調査区内は70~120cm程度盛土されており大量の廃土が予定されたため申請者側からダンプ3台の現物支給をうけ、表土の一部とブロック塀は調査区外に搬出した。4月12日から作業員により遺構検出を行ったところ全面で遺構を確認した。遺構の内容は弥生時代中期前半から中頃にかけての墓群で壺棺は大型棺4基、小型棺9基、十墳墓4基、土坑6基である。試掘調査で壺棺などの存在を全く予想できないまま調査工程を組んだため、実際の調査では調査期間に余裕がなく黄金週間も1日を除き調査を行った。その後5月14日に西側を一部拡張して廃土下の壺棺を掘り上げたあと、そのまま埋め戻しを行い調査終了し、15日に引越を行った。

2. 調査の記録

1) 弥生時代の遺構

(1) 壺棺墓

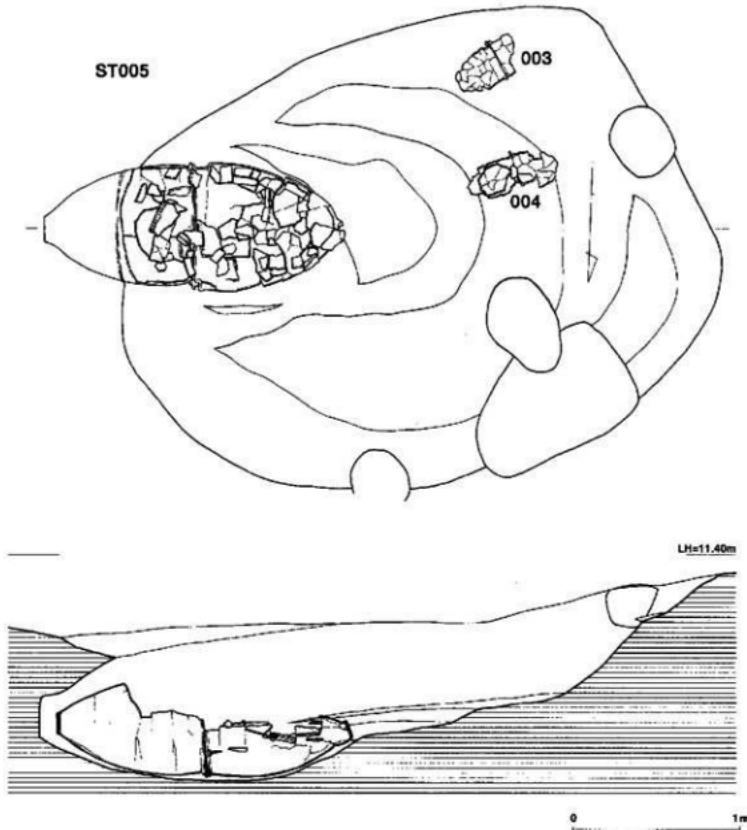
S T 0 0 2(第7図) 調査区の東側で検出した小型壺の單棺である。大型棺のS T 0 2 3に伴う。主軸をN-17°-WにとりS T 0 2 3の主軸に直交する。ほとんどが削平されており、口縁から胴部の一部分のみ遺存している。出土遺物(第10図) 14は復元口径40.3cmを測る。鋸先口縁で内側に鋭い稜を持つ。口縁下に不明瞭な突帯を2条貼り付ける。外面は赤色顔料を施し赤褐色を呈す。内面淡褐色、口縁上面には赤色顔料を塗布していない。胎土は白色砂を多量に含む。胴部下半の器壁は3~4mmと非常に薄い。焼成は良好。

S T 0 0 3(第7図) 調査区の北寄りで検出した小型壺の複棺である。大型棺のS T 0 0 5に伴う。主軸はN-63°-Eで、S T 0 0 5の主軸にはほぼ平行する。削平が著しく口縁と胴部の一部のみ遺存している。出土遺物(第8図) 0 3は上壺である。復元口径28.4cmを測る。胴部上半のみの遺存で下半部は削平されている。口縁はやや上向きのL型口縁で胎土は細かく白色砂を多量に含む。器壁は2mmと薄い。外面に赤色顔料を塗布している。0 4は下壺である。復元口径24.6cmを測る。胎土粗く1mmほどの白色砂を多量に含む。器表面の遺存は悪いものの、口縁下の窓みに赤色顔料が残っていることから、外面全面に顔料を塗布していたと思われる。

S T 0 0 4(第7図) S T 0 0 3とともにS T 0 0 5に伴う小型壺の複棺である。主軸をN-72°-Eにとり、S T 0 0 3・0 0 5に平行する。下壺は中に別の小型壺を入れて二重にしている。削平により口縁と胴部の一部のみの遺存である。出土遺物(第8図) 0 5は上壺である。復元口径は27.4cmを測る。口縁断面形は二等辺三角形を呈し、上面はほぼ水平である。胎土は細かく白色砂を多く含む。外面は赤色顔料を塗布している。胴部は細片となっており、復元は不可能である。

0 6は下外側壺である。復元口径は26.5cmを測る。口縁はやや上向きのL型口縁で内側にわずかに張り出している。白色砂を多く含み焼成は良好。0 7は下内側壺である。復元口径23.8cmを測る。

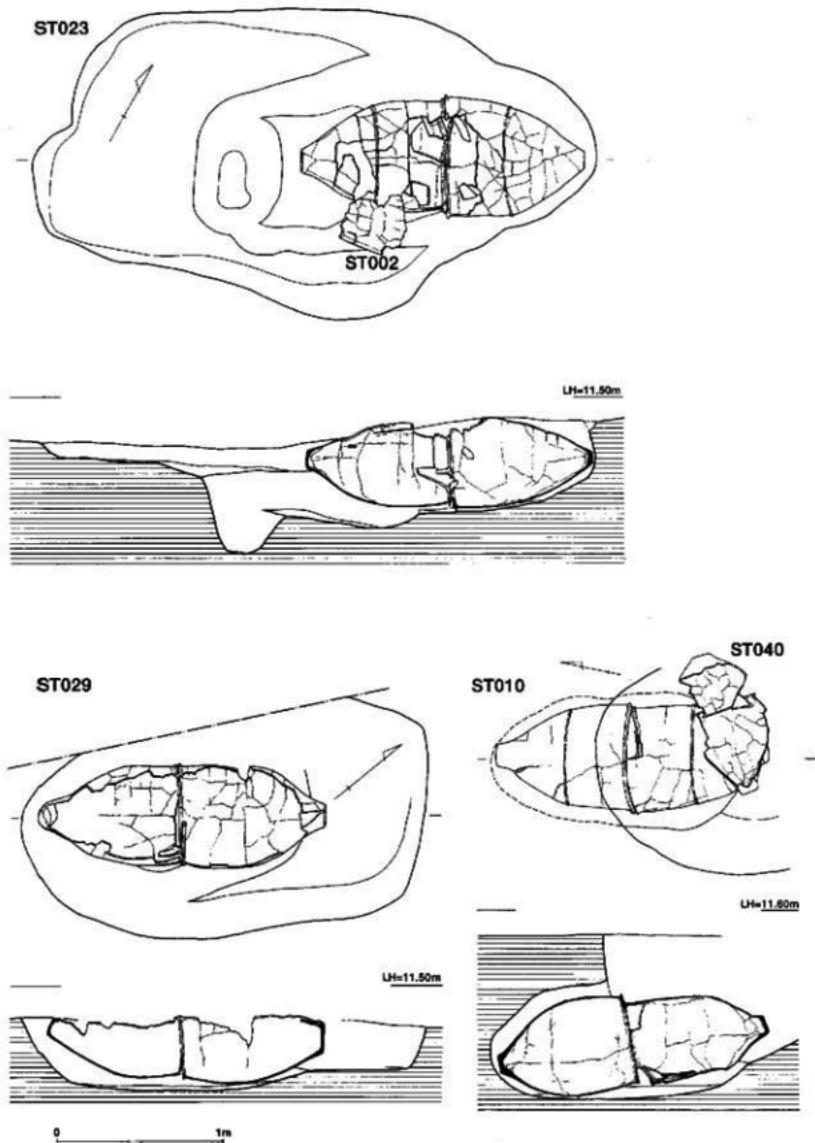
S T 0 0 5(第5図) 調査区の北寄りで検出した大型壺の複棺で主軸をN-88°-Eにとる。小型棺のS T 0 0 3・0 0 4を伴う。掘り方は東西に長い楕円形で東西357cm、南北265cmを測る。掘り方は



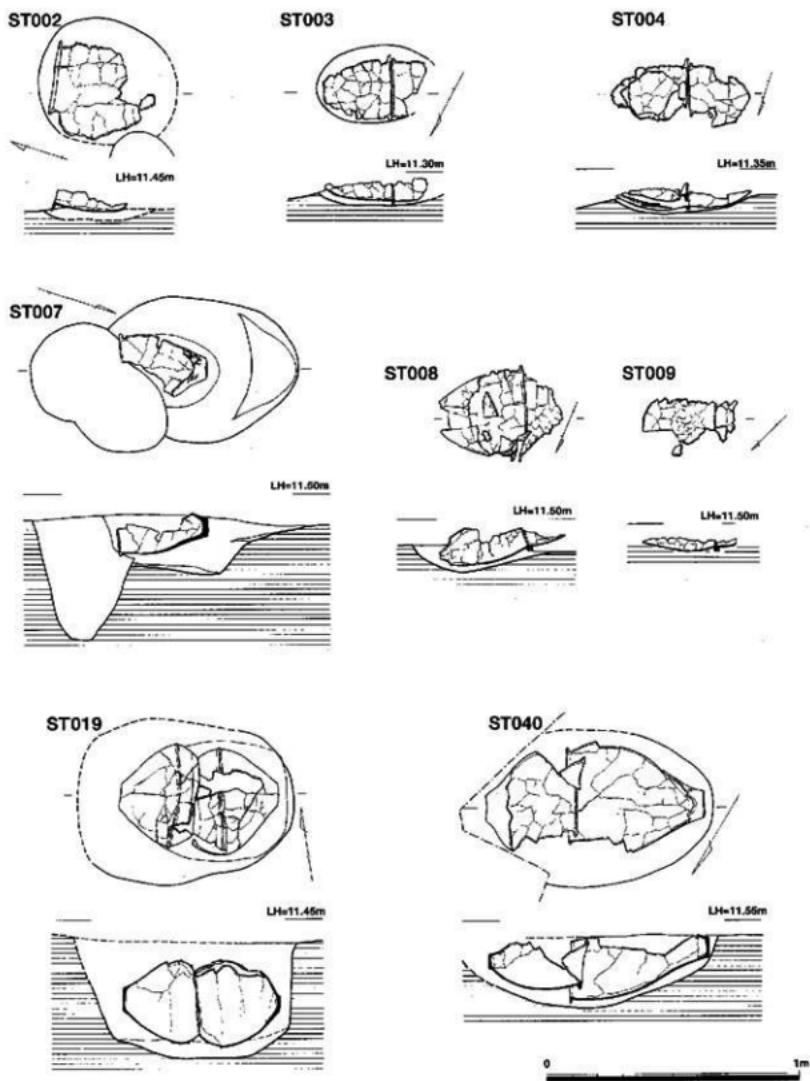
第5図 大型壺棺出土状況実測図Ⅰ (1/30)

東に向けて階段状に深くなり、東端から横穴を掘り込む。埋置角度はほぼ水平である。出上遺物(第8図)。01は上壺である。口径64.6cm、器高85.4cmを測る。淡橙色土で全体にナデ調整を施す。胎土は淡橙色を呈し、白色砂を多く含む。焼成は良好で器壁は9mmと薄い。胴部は砲弾型を呈し、中央の尖帯から緩やかなカーブを描きながら狭まり底部形12cmを測る。突帯は胴部に1条貼り付けている。外面全面に赤色顔料を施す。口縁はほぼ水平である。02は下壺である。口径69.2cm、器高89.2cmを測る。外面は淡褐色と橙色のまだらで内面は淡褐色、一部黒色を呈す。1mm程の白色砂を多量に含んでいる。焼成は弱くやや軟質であるが器壁は一部で6mmを測り非常に薄い。底部径は11.5cmを測る。口縁はやや外輪に張り出す。

ST007(第7図)調査区の東側で検出した小型壺の単棺である。主軸をN-18°-Wにとる。平面は南北に長い梢円形を呈す。掘り方断面は浅皿状を呈し、北側の床面から13cmの所に段がつく。南側のSP012に切られ、上側約半分は削平をうけている。出上遺物(第12図)。17は復元口径29.6



第6図 大型麦柏出土状況実測図Ⅱ (1/30)



第7図 小型漆棺出土状況実測図 (1/20)

cm、器高33.1cmを測る。外面は橙色と黄橙色のまだらで、胎土はやや粗く細かな白色砂を含んでいる。口縁は鋤先口縁で底部はわずかにあげ底を呈す。器表面の遺存は悪いが外面は口縁とその直下は横方向のナデ、その他は縱方向のハケ、内面はナデを施す。焼成は弱くやや軟質である。

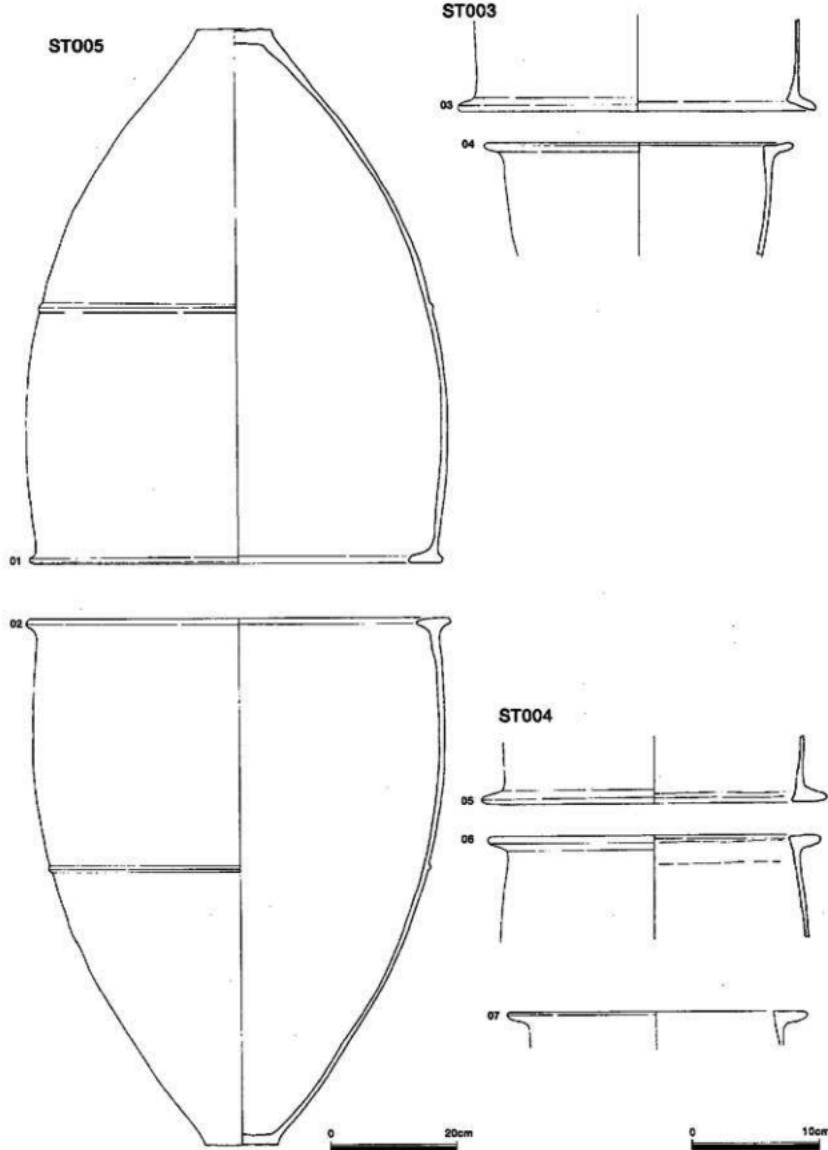
S T 0 0 8 (第7図) 調査区の東南側で検出した。主軸をN-67°-Eにとる小型壺の複棺で南西からの挿入である。土壙壺のS R 0 3 4に伴う。削平により上壺は口縁のみ遺存、下壺は口縁の一部を欠く。出土遺物(第12図)。1 8は上壺である。復元口径29.8cmを測る。口縁は鋤先口縁である。全体に淡褐色を呈すが口縁下の部分に赤色顔料が残っているため、元々は外面全体が赤色を呈していたと思われる。1 9は下壺である。復元口径30.7cmを測る。内外面とも赤色顔料を塗布している。胎土は1 mmほどの白色砂を多量に含んでいる。口縁下に突帯を1条貼り付ける。口縁下にわずかにナデ調整の痕跡がみられる。焼成が弱くやや軟質で胴部下半は細片化し復元できない。

S T 0 0 9 (第7図) S T 0 0 8と同様にS R 0 3 4に伴う小形壺の複棺である。主軸をN-44°-EにとりS R 0 3 4の主軸に直交する。削平をうけ上壺は口縁の一部、下壺は口縁と胴部の一部のみ残存する。掘り方も確認できずどちらが上壺かは確定できていない。出土遺物(第12図)。2 0は上壺である。復元口径21.2cmを測る。口縁は逆し字形を呈し、口縁下に1条の突帯を施す。淡黄褐色を呈し、1 mm以下の細かな白色砂を少數含む。器壁は3 mmと薄く焼成は良好である。2 1は下壺である。復元口径25.4cmを測る。口縁は逆し字形でやや上向きである。外面は淡黄褐色上を呈すが口縁下に赤色顔料がわずかに付着している。胎土は細かく1 mm程の白色砂を多く含む。

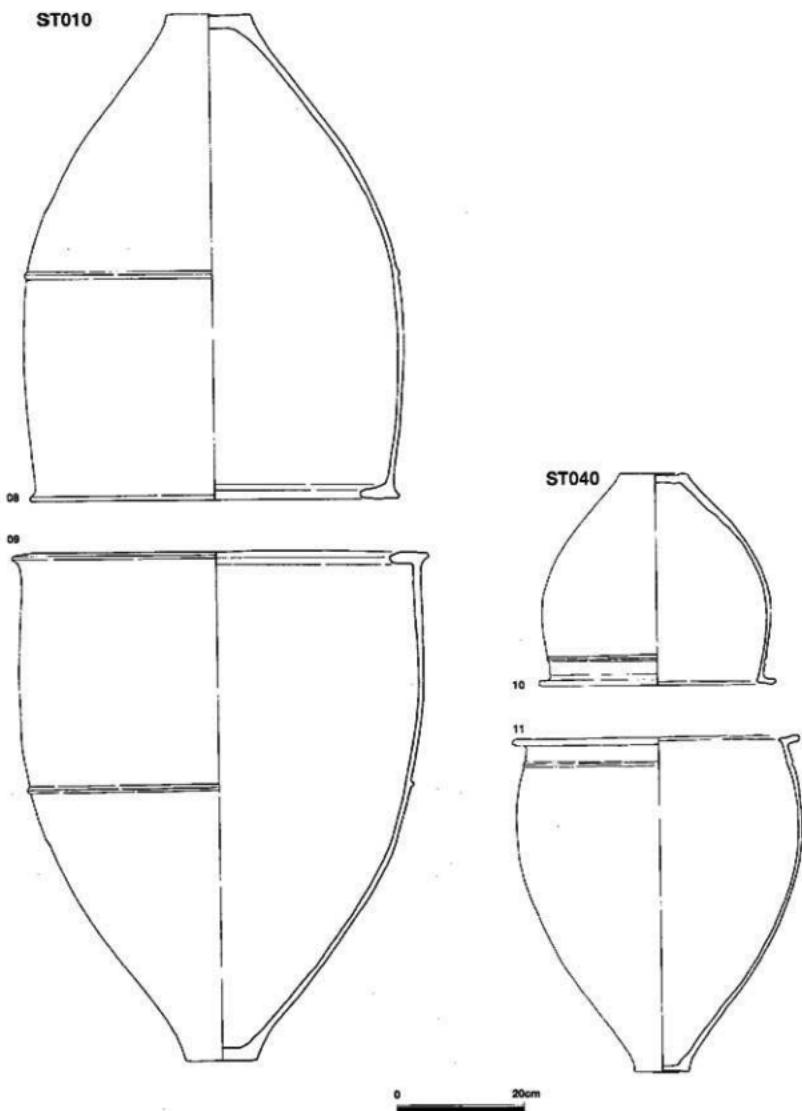
S T 0 1 0 (第6図) 調査区の南東端で検出した。S T 0 4 0を伴い、S K 0 1 3に切られる。主軸をN-13.5°-Wにとる複棺で壺の遺存状況は良好である。掘り方は調査区外に延びるが現状では楕円形を呈すると思われ、垂直に掘り込んだ縦坑から北側に横穴を掘り込み壺棺を埋置している。掘り方の深さは97cmを測る。出土遺物(第9図)。0 8は上壺である。口径58.4cm、器高77.2cmを測る。口縁は内側に大きく張り出し、胴部に1条の突帯を貼り付ける。全体に赤橙色を呈し、白色砂を多く含む。調整は外面は丁寧な横ナデ、内面は口縁から2/3が横ナデ、底部が緩もしくは斜め方向のナデを施す。器壁は7 mmと薄い。0 9は下壺である。口径66.4cm、器高81cmを測る。

S T 0 1 9 (第7図) 調査区の北西端で検出し、主軸をN-82°-Wにとる。広口口縁壺の頭部を打ち欠き、合口にして使用している。埋置角度はほぼ水平である。出土遺物(第12図)。2 2は上壺である。最大胴径38cmを測る。胴部上半に薄い突帯を2条貼り付ける。外面暗赤褐色、内面暗褐色を呈す。白色砂を多く含み、焼成は弱い。表面のほとんどが剥落している。全体的にいびつである。2 3は下壺である。最大胴径38.4cmを測る。肩部に2条の突帯を施し、外面は赤色顔料を塗布している。胴部上半は均整がとれているが、下半は歪みが大きい。調整は外向下半は丁寧なミガキ、内面は丁寧な横ナデ、底部に指オサエを施す。焼成後に底部を打ち欠いている。

S T 0 2 3 (第6図) 調査区の北東側で検出した大型棺の複棺で主軸をN-62°-Eにとる。S P 0 0 1に切られ、S T 0 0 2を伴う。掘り方は東西に長い楕円形で東隅を一段掘り下げて壺棺を埋置している。土壙掘り方は長さ240cm、幅114cmと壺棺の大きさに比べると長大で、床面西端に上坑上の掘り込みを持つ。出土遺物(第10図)。1 2は上壺である。口径61.7cm、器高81.6cmを測る。口縁は内側に強く張り出し、やや外側が低い。胴部に1条の突帯を施す。外面は全体的に淡橙色であるが、一部黒色および赤褐色を呈しており、焼成後赤色顔料を塗布したのち、黒色顔料を塗布している。内面は黒褐色を呈す。胎土中に白色砂を多量に含む。焼成はやや弱めであるが器壁は最小で9 mmと薄い。胴部上半で帯状に赤褐色を呈す部分がある。表面の調整等に違いがないため、胎土に使用した粘土の違いと思われる。幅11cmで径の約半周を巡る。1本の粘土帯の大きさであろう。1 3は下壺である。

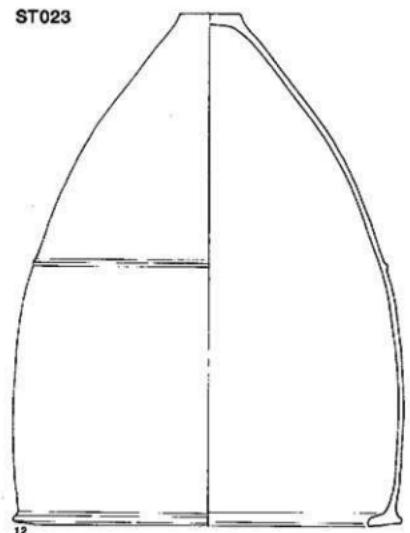


第8図 壕棺実測図 I (1/4、01・02は1/8)

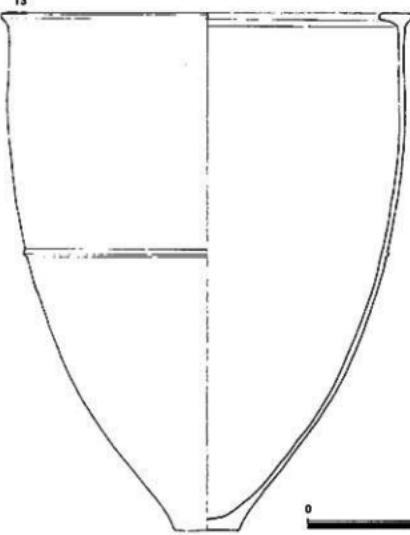


第9図 壱棺穴洞図Ⅱ (1/8)

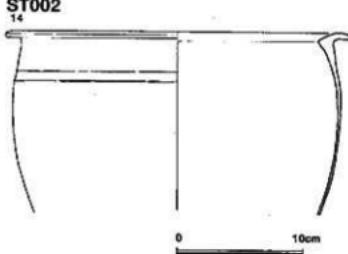
ST023



12

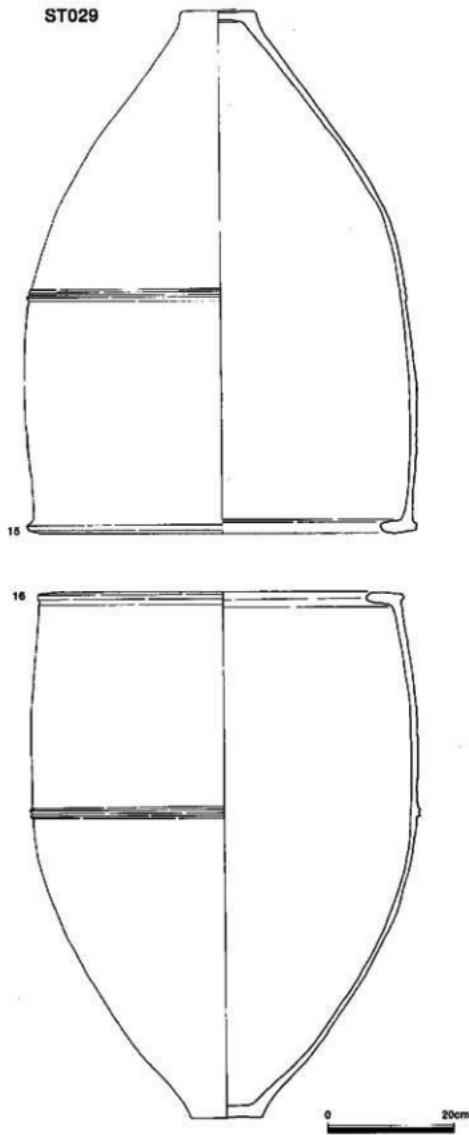


ST002



0 10cm

第10図 壺棺実測図Ⅲ (1/8、14±1/4)

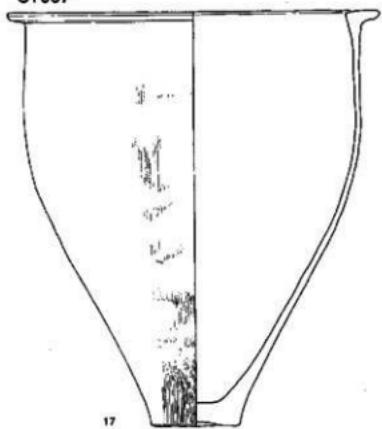


第11図 墓棺実測図IV (1/8)

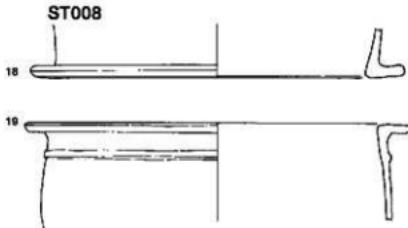
口径65.3cm、器高82.6cmを測る。口縁は内側に大きく張り出し、ほぼ水平である。胴部中央に1条の突帯を貼り付ける。外面は赤黒く、赤色顔料の上から黒色顔料を塗布している。内面黒褐色。胎土は内外表面は白色砂を多く含むが、それに挟まれた真ん中はほとんど砂を含まない。焼成はやや崩め。器壁は突帯下が一番薄く8mmを測る。ST029(第6図)調査区西端で検出した大型棺の複棺である。主軸をN-38°-Eにとる。当初上窓の底部を確認したが、廃土の下で調査できなかったので、埋め戻しの時に拡張して調査を行った。掘り方は梢円形を呈し、北側がやや高い。複棺は北側から入れこみ、埋置角度はほぼ水平である。大型棺では掘り方が一番浅く、削平により上半部の1/3が削られている。出土遺物(第11図)。15は上窓である。復元口径56cm、器高84.1cmを測る。口縁は内側に大きく突きだし、外側にはほとんどでていない。胴部中央がやや張り出し、M字突帯を貼り付けている。色調は上半橙色、下半は暗黄褐色を呈す。胎土は白色砂を多量に含んでいる。調整は内外面とも横などを施す。外底部に大きな黒斑あり。16は下窓である。復元口径62cm、器高83.4cmを測る。胴部にM字型の突帯を貼り付ける。外面は赤色顔料を塗布。底部に黒斑有り。内面は黒褐色を呈す。胎土中に白色砂を多量に含む。器壁は薄く最も薄い部分で6mmを測る。

ST040(第7図)調査区の南

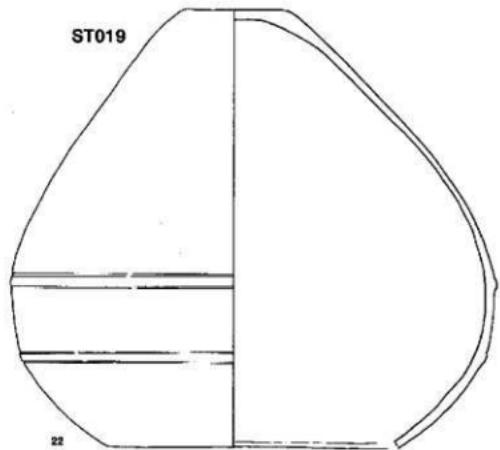
ST007



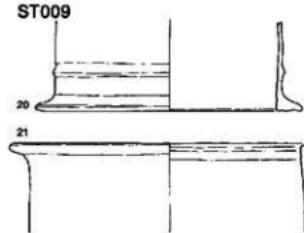
ST008



ST019

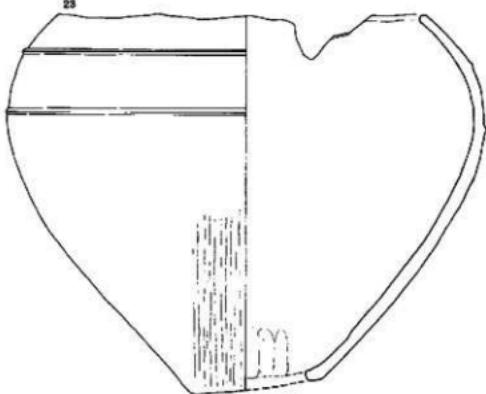


ST009



22

23



0 10cm

第12図 妻棺実測図V (1/4)

端で検出した。ST 010に伴う。主軸をN-59°-Eにとる小型壺の合口で、掘り方は平面が楕円形を呈し、断面は壺棺に沿ったレンズ状をなす。埋置角度はほぼ水平で、削平により上部約1/2が削られている。出土遺物（第9図）。10は上壺である。復元口径38.3cm、器高33.5cmを測る。口縁は鋤先口縁で、口縁下に突帯を1条貼り付ける。内外面とも赤褐色を呈し、調整は外面口縁が横ナデ、内面は縱ナデで口縁は指オサエを施す。焼成は良好である。11は下壺である。復元口径36.6cm、器高53.4cmを測る。口縁は鋤先口縁で、口縁下に1条の突帯を貼り付ける。色調は淡褐色で外面は赤色顔料を施す。胎土中に白色砂を多量に含む。焼成は良好で器壁は薄いところで5.5mmを測る。

（2）土壙墓 調査区の東側で4基検出した。

SR 011（第13図）調査区の北側で検出した。主軸をN-67°-Eにとる。墓壙の掘り方は長方形を呈し長さ134cm、幅57cm、深さ46cmを測る。もとはSR 032・034同様一段目の掘り方があったと思われる。覆土は木蓋の上を覆っていた暗黄茶褐色粘質土が底部に堆積し、その上に自然堆積した黒色土とロームブロックがみられる。出土遺物はなし。

SR 032（第13図）調査区の東側で検出した2段掘りの土壙墓である。主軸をN-18°-Wにとる。墓壙は隅丸長方形を呈し、長さ164cm、幅126cmを測る。主体部は主軸が墓壙よりやや東に振れ、長さ109cm、幅43cm、深さ49cmを測る。主体部は南側を除いてオーバーハンクしておらず、特に北側は著しい。出土遺物（第13図）。24は壺口縁である。わずかに逆L字型を呈す。外面は暗茶褐色で継ハケを施す。埋没時に周辺から流れ込んだものである。

SR 033（第13図）SR 032の南側に接する。2段掘りの土壙墓で主軸をN-38°-Wにとる。墓壙は長方形を呈し長さ164cm、幅105cm、深さ29cmを測る。北側の短辺部分が一段浅くなっているが、これがSR 033の一部かもしれない別遺構であるかは土色からは判断できなかった。主体部は南側の小口が広い長方形で長さ89cm、幅61cm、深さ44cmを測る。掘り方はほぼ垂直である。出土遺物はなし。

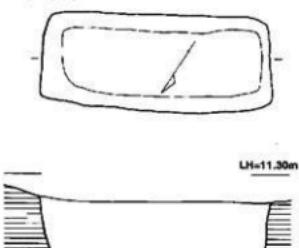
SR 034（第13図）SR 032・033の西側に位置する。小型の壺棺ST 008・009を伴う。2段掘りの土壙墓で主軸をN-48°-Wにとる。墓壙は長方形を呈し、長さ227cm、幅177cm、深さ26cm、主体部は長さ163cm、幅66cm、深さ63cmを測る。上部部掘り方は両側の小口が袋状にオーバーハンクしているが特に北西側のえぐれが著しい。床面は北西側に緩やかに傾斜している。南東側が頭位か。副葬品はない。出土遺物。覆土中から25・26が出土した。25は壺口縁である。逆し字型の口縁で、外面は赤褐色を呈す。胎土は粗く白色砂を多量に含む。26は壺の肩部である。内外面とも黒褐色を呈し、内面は横方向のミガキ、外面には貝殻羽状文を施す。焼成良好である。板付Ⅱ式の壺で弥生前期後葉である。2点とも流れ込みである。

（3）土坑

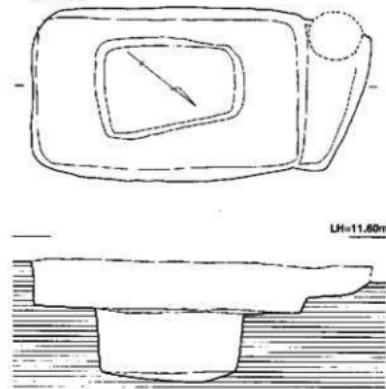
SK 006（第14図）調査区中央西寄りで検出した。ST 010を切る。主軸をN-74°-Wにとり、平面は隅丸の方形、断面は逆台形を呈す。底面にピット状の掘り込みがあるが、SK 006に伴うか不明である。上層で壺棺の破片がまとまって出土した。出土遺物（第16図）。27は大型壺棺の破片である。口縁が大きく内側に突きだしており、ST 005・023などの壺棺墓と同時期である。28は小型壺底部で外底部は半球状の上げ底になっている。底径6.6cmを測る。

SK 013（第14図）調査区東南端で検出した。南側が調査区外に延びるが現状では長方形を呈し、一辺が約150cmを測る。覆土の下半部はロームブロックを含む自然堆積である。中央にほぼ水平な黒色土層が形成されている。竪穴式住居とすると小さすぎるため土壙墓である可能性も考えられる。出

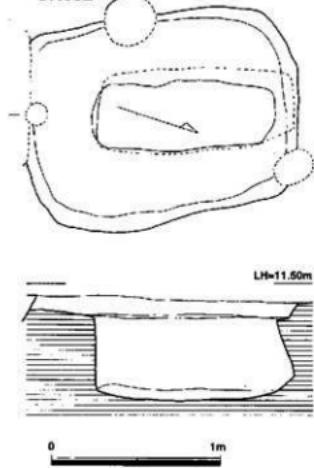
SR011



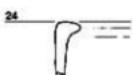
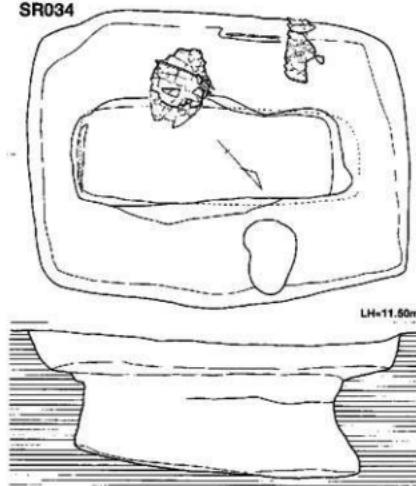
SR033



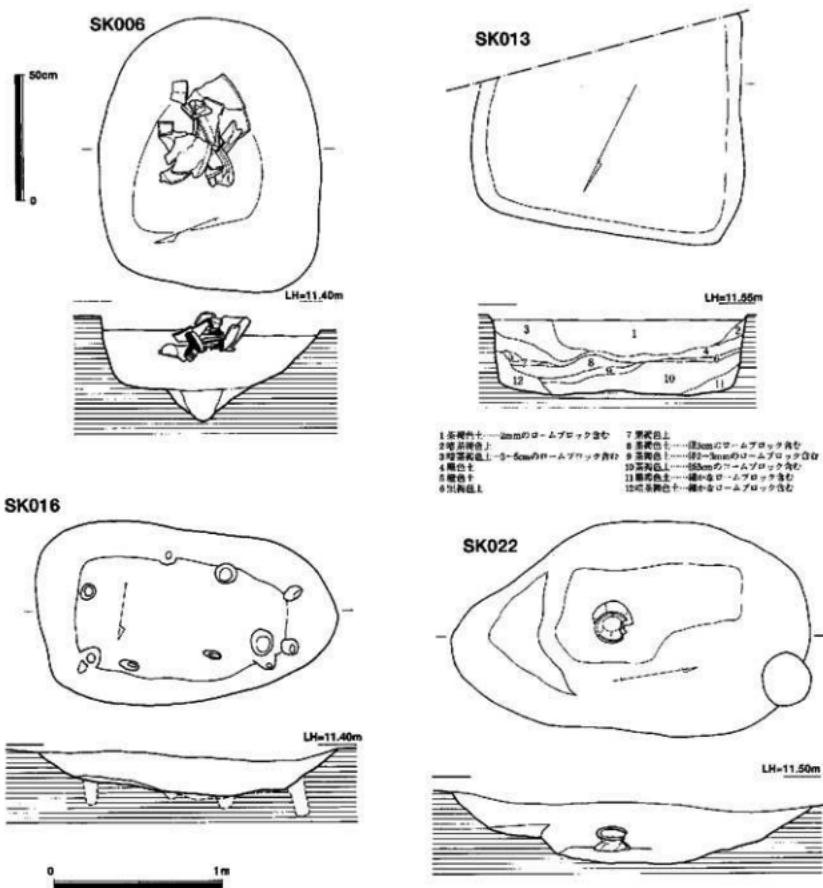
SR032



SR034



第13図 土壌調査実測図(1/30、遺物(21/4))



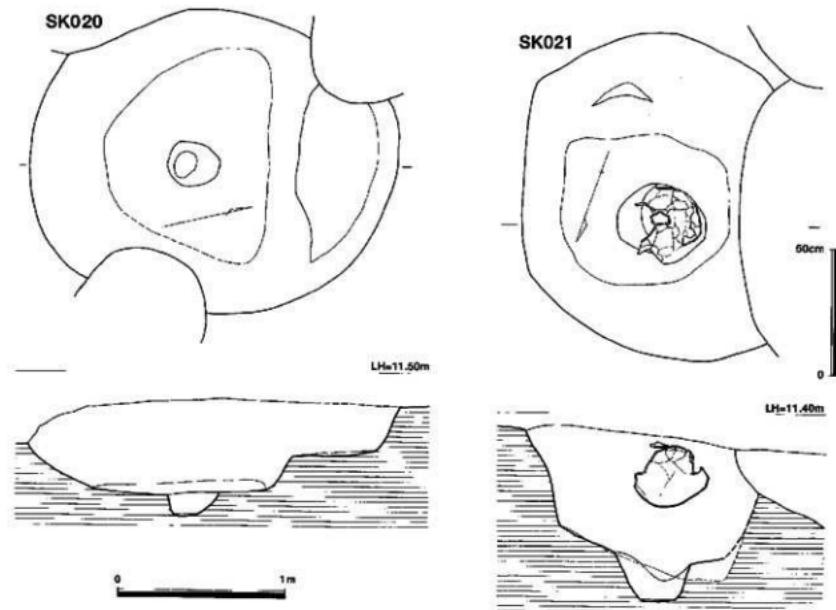
第14図 土坑実測図 I (1/30、SK006は1/20)

土遣物無し。

SK016 (第14図) 調査区の南西側で検出した。平面は東側が角張る楕円形を呈し、主軸を N-82°-E にとる。長径178cm、短径110cm、深さ31cmを測る。断面は浅皿状で底部の縁辺に杭状の痕跡が見られる。覆土は黒色土の單層である。出土遺物無し。

SK018 (第4図) 調査区の西端で検出した。南側が調査区外にのびるが現状で長径約170cm以上、幅170cm、深さ21cmを測る。底面は中央部が窪みレンズ状をなす。東側に楕円形の掘り込みをもち、長径144cm、短径81cm、深さ23cmを測る。覆土は暗茶褐色を呈し2~3mmのロームを含む。ロームは下層ほど多くなる。出土遺物なし。

SK020 (第15図) 調査区の中央やや西寄りで検出した。SK006に切られ、SK021を切る。平面形は円形を呈し、径217cm、深さ57cmを測る。北側に底面から21cmの高さに段をもつ。覆土は黒褐

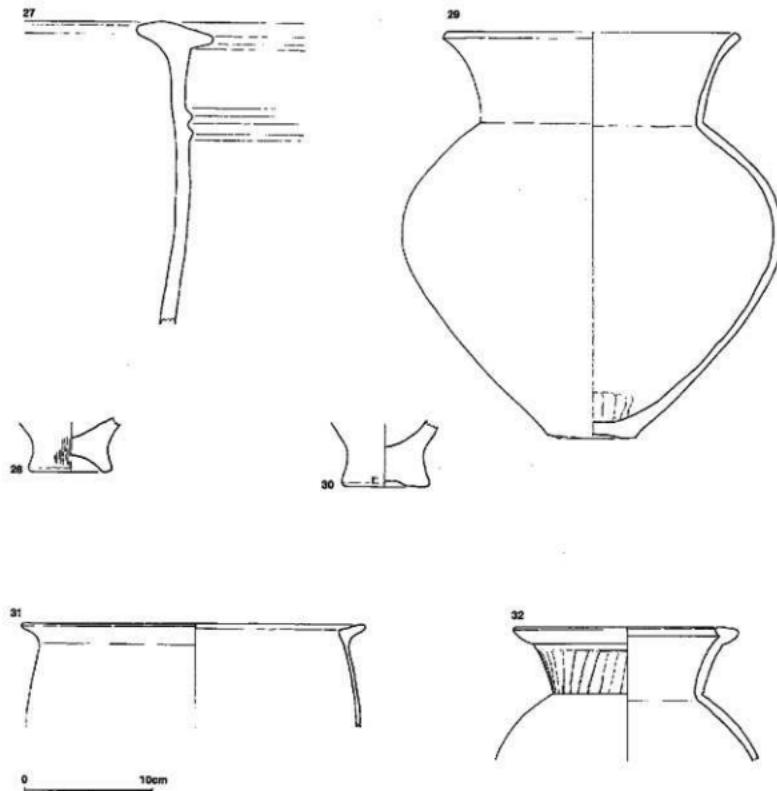


第15図 土坑実測図Ⅱ (SK020は1/30、SK021は1/20)

色上で1~2mmのロームを全体に含んでいる。出土遺物(第16図)。30は小型壺底部である。胎土中に白色砂を多量に含み、焼成は弱い。31は壺の口縁部である。復元口径27.2cmを測り、口縁は上向きの鋤先口縁である。

SK021 (第15図) 調査区の中央で検出した。SK020に切られる。平面は六角形を呈し、径133cm、深さ61cmを測る。底部中央に径29cm、深さ18cmのピット状の掘り込みが見られる。底部から25cm上で横倒し状態の壺が出土した。出土遺物(第16図)。29は広口口縁壺である。復元口径23.7cm、器高32.3cmを測る。調整は外面は不明、内面は丁寧なナデ、底部は指オサエを施す。胎土中に白色砂を多量に含む。焼成は良好である。

SK022 (第14図) 調査区の中央部で検出した。平面は南北に長い指凹形で、主軸をN-9°-Eにとる。南側に三角形の突出部が付く。長径21.3cm、短径12.8cm、深さ43cmを測る。底面で胴部下半を打ち欠いた鋤先口縁壺が出土した。出土遺物(第16図)。32は壺である。口縁は緩やかに外反しながら立ち上がり、口縁端部で水平方向に折れ曲がる。胴部は球状を呈す。調整は外面がミガキ、内面にはナデを施す。外面には赤色顔料を塗布。頭部に暗文を施す。胎土中に白色砂を多量に含む。焼成良好。



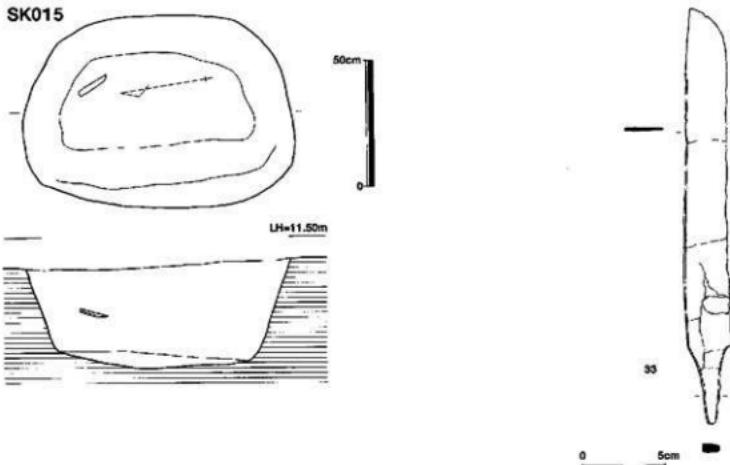
第16図 土坑出土遺物実測図（1/4）

2) その他の時期の遺構

S K O 1 5（第17図）調査区南側で検出した。主軸をN-9°-Eにとる。平面は隅丸の台形を呈し、長径54cm、短径38cm、深さ22cmを測る。覆土は5cmほどの黒褐色土とロームのブロックが混合しており、隙間に灰色土が混じる。遺物はわずかに弥生土器の小片が出土した。出土遺物。33は鉄製の短刀である。長さ24.7cm、幅2.7cm、刃渡り20cmを測る。博多遺跡群や箱崎遺跡群で同じような短刀が出土している。時期は古代末から中世に属する。

3. 小結

今回の調査では弥生時代の集落の一部を確認した。集落の初現はS K O 3 4に含まれていた板付II式の壺片や17次E区で出土した夜白式土器片から弥生時代前期初頭まで遡ると考えられる。確実な遺構としては中期前半の城ノ越式の上器片が当土する貯蔵穴が17次調査E区で確認されているが数は少



第17図 SK015実測図(1/20、1/3)

ない。次の須次I式になると竪穴式住居と貯蔵穴が台地上にまばらにみられるようになる。この時期の遺構も多くはないものの遺物は後期後半の遺構や古代の遺構の中から多量に出土するため、後世の削平により消滅したものと考えている。今回の墓群はこの時期の集落に伴うもので、大型の壺棺はいずれ弥生時代中期前半から中頃に比定される汲田式壺棺である。小型棺は須次I式期で時期的には同時期である。土壙墓は副葬品など時期を決める遺物を持たないが、大型壺棺と同様に須次I式期の小型棺を伴うため、壺棺と同時期であると考えられる。本調査区の立地は台地北西端の落ち際で、ST029をのぞく壺棺墓と上塙墓群は台地落ち際の等高線に沿う列状を為す可能性がある。

ST029も列状を為す可能性はあるものの17次調査E区の結果から南側には延びないことは判明した(第3図)。中心にSK020・021・022などの祭祀土坑と考えられる遺構があるため、それを取り囲む円状の配置になる可能性もあるが、現状ではまだ不明である。

本調査区内ではSK013の性格が不明であるがそれ以外では竪穴式住居や貯蔵穴などの生活遺構は存在しない。また第3図をみると判るように17次E区では北端の当調査区隣接部に壺棺が確認されたのみでその他に壺棺墓や確実な上塙墓がみられない。また竪穴式住居や柱穴群はやや南側で確認されているがその間に確実な柱穴などではなく、長径2m、深さ120cmほどの土坑が数基みられるのみであるため、墓域は集落に近接するものの境界は明確にされていたと考えられる。また、中期前半から中頃の汲田式壺棺は、今回の台地北端部の他に3次調査の南側で平成13年末に調査した21次調査で確認されているがその後の時期の壺棺墓は破片のみの出土で墓域が確認されておらず、今後の調査に期待されることが多い。SK015は出土遺物から古代末以降と考えられるが、今のところ御供所井尻線の調査範囲では9世紀以降の遺構はみられない。しかし17次調査のE区や22次調査の表探資料には青磁片など古代末～中世の遺物が含まれており、この時期の遺構の存在が予想される。

北側に隣接する五十川遺跡では第3・4次調査で中世の集落跡が調査されており、市道御供所井尻線の試掘調査においても台地南西側で中世に属すると思われる上坑や柱穴群が確認されているため中世集落の中心は五十川遺跡と思われる。今後の調査が期待される。

図 版

図版 1



調査区全景（南から）



調査区全景（北西から）



ST 002(右)・ST 023



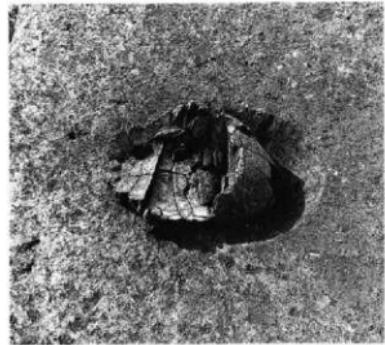
ST 003・ST 004(手前)(北から)



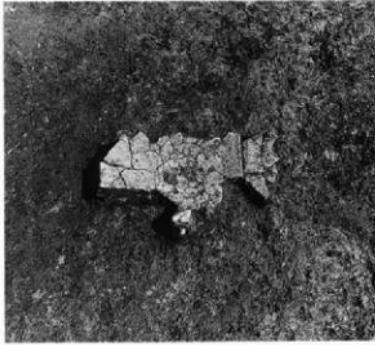
ST 005(北から)



ST 007(東から)



ST 008(南東から)



ST 009(北西から)

図版3



S T 0 1 0 (西から)



S T 0 1 9 (南東から)



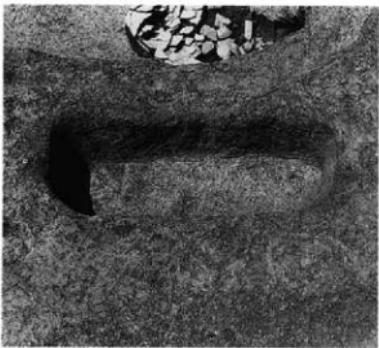
S T 0 2 3 (南東から)



S T 0 2 9 (西から)



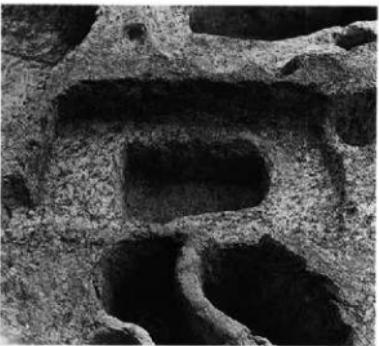
S T 0 4 0 (北から)



SK 011(南から)



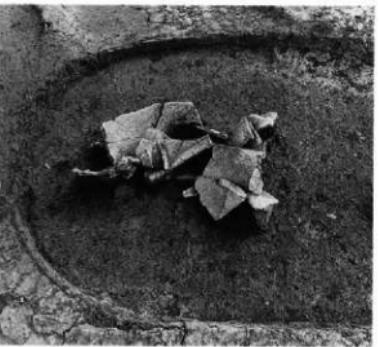
SK 032(北東から)



SK 033(北東から)



SK 034(北東から)



SK 006(北から)

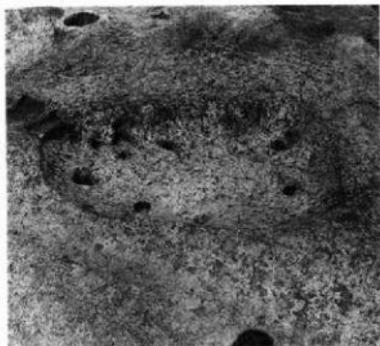


SK 013(北西から)

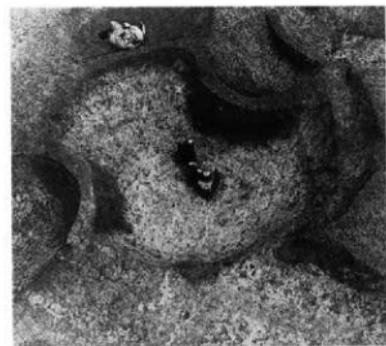
図版 5



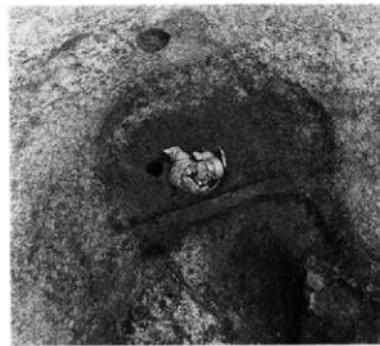
SK 015(南から)



SK 016(南から)



SK 020(西から)



SK 021(南西から)

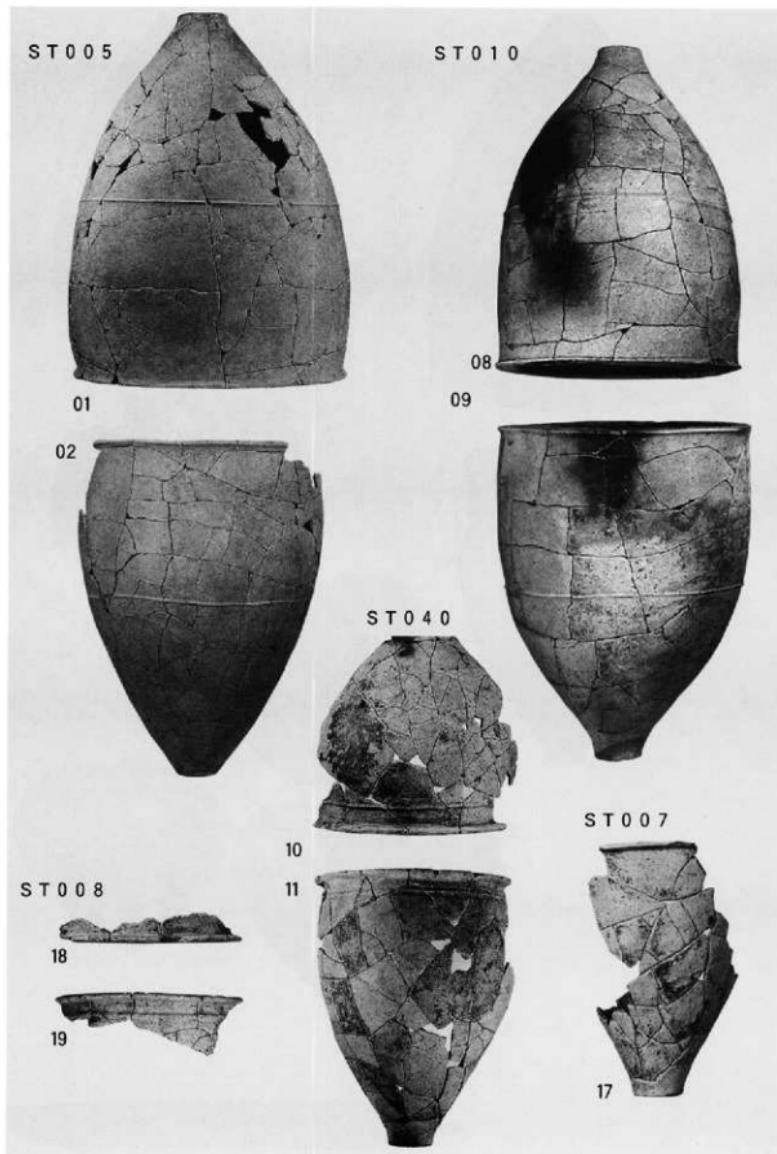


SK 022(西から)

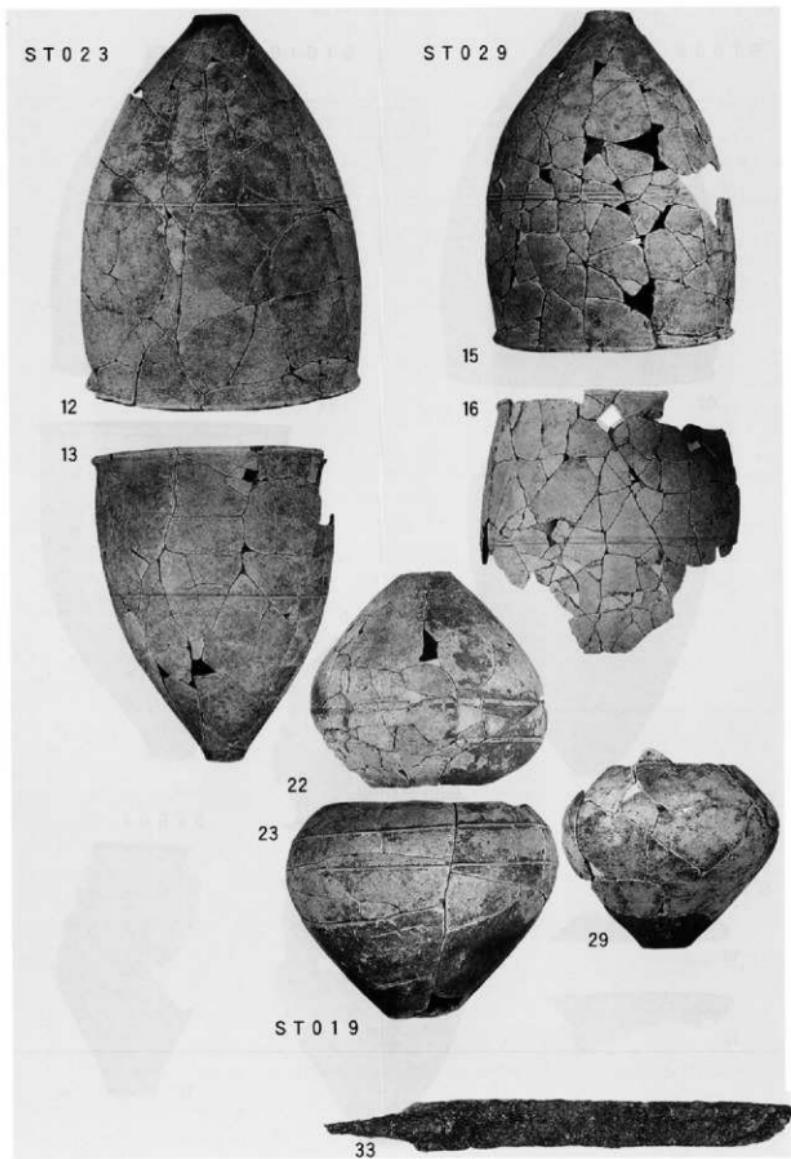


土坑集中部(北から)

図版6



图版 7



井尻B遺跡10

—井尻B遺跡第16次調査の報告—
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第721集

2002年3月29日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1
☎ 092-711-4667

印刷 株式会社 西日本新聞印刷
☎ 092-611-4431

